

ペトリカメラ元社員へのインタビュー

作者: 2chペトリスレリバーアダプタ氏

発行: 2013.5.25

訂正: 2015.6.1

本文書の無断転載、引用を禁じます。引用には各証言者及びリバーアダプタ氏の許可をとってください。

2013.5.25 2chペトリスレまとめサイト管理者 264 記す (inugami.mamoru@gmail.com)

ペトリカメラ元社員の証言

柳澤明さんのご親族からご紹介をいただき、元ペトリカメラ技術者の方々にお話を聞くことができました。インタビューは2013年5月18日梅島にて行いました。リバーアダプタが、お聞きした内容をまとめましたので掲載します。



元ペトリの技術者だった、(右から) 半田善朗さん、今関幸夫さん、芦田保夫さん。

今回お話を聞いた、元ペトリ技術者の方の経歴

- 半田善朗さん 1963年～1973年まで在籍

不況で電機メーカーの内定が取り消され、ペトリを受けたのが入社きっかけだそうです。半田さんの入る前、レンズシャッターの設計者はキヤノンに引き抜かれてやめてしまっていて、教わる人がいなかったそう。

半田さんの最初の仕事は500mmの鏡筒設計、次にOEMのansco726、その後カラー35(後述)のシャッターを担当され、35Eや電子レンズシャッターの開発など、いろいろな機種を担当されたあとペトリを退社。ゼンザプロニカ、ミランダ(倒産まで)、ゼニックス、羽田光機、とうつられ、最後は独立されて、設計の仕事をしているそうです。

- 今関幸夫さん 1960年～1977年の倒産まで在籍

バレーボールの選手で、ペトリと試合したのが縁で入社され、最初はレンズ磨きの工程に配属。3ヶ月でやめようと思ったが、柳澤さんが引っ張ってくれて、トレースを1年やって設計に配属されたそう。「ペトリは学歴とか関係なくそういうことがあった。柳澤さん自身もそうだったから。」とのこと。

ハーフ7、V6、FT、カラー35、MF-1、REなど多くの機種を担当され倒産するまでいらっかった。

ペトリ倒産後、柳澤さんと一緒に移られたゼニックスに3年いて、観音開きのペトリCF-35を開発。その後ソリ

ゴールジャパン、ゼンザブロニカ、サンパック、そこでやっていた設備とともに台湾に渡られて、現地でカメラを数機種生産。定年で日本に帰ってこられたそうです。

- 芦田保夫さん 1963年～1975年まで在籍

光学設計、レンズの生産技術を担当され、当時のペトリのほとんどのレンズをみられたとのこと。ペトリをやめた後は、ゼンザブロニカ、ゼニックス、Sea&Seaへと移られたそう。

- ペトリの開発を主導された、柳澤明さんのこと

柳澤さんは横須賀の予科練で飛行機の整備から仕事を始められたそうで、尋常小学校しか出ていなかったそうです。

御三人の入社当時は、やなさん(柳澤さんをそう呼ばれてました)は部長。どういう経緯でペトリにはいられたのか、入ってからのことなど、詳しくはわからないとのこと。やり方は、教えるというよりまずは自由にやらせてみる。柳澤さんがOKを出せば後戻りはせず、製造は柳澤さんが統率されていたそうです。

目は鋭く仕事には厳しい。山やスキー、酒が好きだったとのこと。当時の写真を見せていただきましたが、ダンディーでかっこいいおじさんでした。今関さんが会社に入ったころの柳澤さんのボーナスは、束にすると横じゃなく縦で立ったそうです。(でも柳澤さん

は特別でペトリの給料は安かった。)

柳澤さんはペトリ倒産後、ゼニックスでCF-35を設計されたとのこと。その後、組合との関係が強かった柳澤さんは、ペトリ工業にうつられたそうです。

- 当時の開発と社内の様子

当時の開発は多くて12、3人で、ほとんどが若い人。はいついきなり仕事を任されたそうです。「当時の写真を見なおしたが、みんな子供。当時の他の会社ではやらせてもらえなかっただろう。」「素人集団だが個人のアイデアがみんな生きたので楽しかった。今思うとよくやれたと思う。」(今関さん)

「ど素人が設計しているようなもの。それが、好きかってにやっている。しかし、そうでなければユニークなものではないかった。指導者がいてやりかたを指示されれば同じようになってしまう。」「ペトリは自発的にやっていた。いつまでと設定はされるので、煮詰まってくると2ヶ月間毎日4時間残業したけれど、アイデアが固まるまでは自由にやっていた。」(半田さん)といった話をうかがいました。企画会議も特に合意がなく、みんながあっちの方向じゃないか、こっちじゃないかとやり、なんとなくまとまり、じゃこれでいこう、という感じで進んでいったそうで、若い技術者達が自由に発想してユニークな物を作っていたのがよくわかりました。開発中の機種はコードネームや開発番号はなく、最初から名前をつけてやっていたそうで、カラー35は最初からそうよんでいたそう。デザイナーはおらず、設計者がそれぞれデザインしていたとのこと。「(デザインの)勉強しているわけでもないのにそれなりの形になった。」(今関さん)最終的に形に手をいれる人は柳澤さんぐらい。でも、ここをダイアカットにしよう、とかは担当者がかかってにやって、よければそのまま決まったそうで、古い55/1.8のピントリングなどにいろいろなデザインがあるのは、そういう理由のようです。そのうちコストに厳しくなり、同じ形で作るようになったとのこと。文字などもすべて設計者がやっていたそうで、丸い三日月型のペトリマークは今関さんがデザインしたそうです。

写真工業の記事に名前が出てくる五十嵐さんも部長で、V6など一眼レフを担当されていたとのこと。神経質な人で、柳澤さんとはぶつかることも多かったそう。一時は柳澤さんが設計を外れたこともあったそうです。ペトリカレンダーがあって祝日も休みでないことがあったそうです。社長(敏夫氏)はワンマンだったが、設計には口を出さず影響はなかったそう。制服は肩に階級章のようなものをつけていた。なぜかはわからないが、色とか星の数で、この人は課長だとかわ

かったそうです。でも、だからと言って社内が軍隊的だとか、上下に厳しいとかではなかったとのこと。ただ、ペトリでは特許は課長以上でしかだせなかったのも、発明者が実際には設計していないことも多いそうです。特許に名前のある敏夫専務は実際には設計していないだろうとのこと。今関さんによると、幻のペトリに載せたロボット風の速写カメラは柳澤さんの設計だそうです。半田さんがペトリをやめた理由は、「組合ができてからおかしくなり、部下が組合員だとともに話ができなくなった。なのでやめた。仕事は楽しかった。」とお聞きしました。ただ、不満が出てきて組合活動が活発になったのは、給料が抑えられていたからだそうです。半田さんが退職した時の退職金は、総務から今までの最高額といわれたけれど、10年勤めて数万円(一桁)だったそうです。

- 栗林家の方々について

社長(繁代さん)は、お婆さん。天皇陛下、象徴という感じ。

工場ではっかむりして掃除していたおばあさんがいて、みんなこずかいの人だと思ったが実は社長だった!なんていう漫画みたいなエピソードもあったとのこと。地味な人だったそうです。専務(敏夫さん)と常務(廣夫さん)はあまり働いてなくて、専務はスキーを会社に持ってきたり、遊びにきているかんじ。また、いろいろ思いつきでできる方だったそうです。「専務は銀行に金を借りに行ったことがない、頭を下げたことがない。」と、やなさんが怒っていた。(今関さん)

営業は九段にあり庸夫常務はそちらにいたそう。この人が一番遊んでいたそうで、社長(敏夫さん)よりも金を使っていた。そのため有名人の知り合いが多かったのも、67年の豪華カタログは、そういう人脈を使ってできたのではないかとのことでした。

栗林家の方々は今どうされているかは、わからないそうです。

- 梅島工場の様子

うなぎの寝床のような建屋で、1階が部品、2階が組み立て、3階レンズ研磨。設計は木造の建屋。工場の隣に寮があったそう。電気部品以外はすべて梅島で作っていて、レンズだけでなく、レンズシャッターユニット、ペンタプリズムも。焼き入れや、メッキ、コーティングなど処理もすべてやっていて、電気部品も簡単なものはやっていたそう。焼き入れは白い粉の青酸カリを使うし、レンズ研磨に使うピッチにトリクロエンが入っているのに、床が汚れるので雑巾で素手で拭いてた。レンズはエーテルとアルコールを混ぜたもので拭くし、メッキもクロムを使うしで、今思うとよく倒れる人が出なかったと思う。(芦田さん) その他の工場は、黒羽はレンズ研磨だけで組み立てはしていなかったそう。杉戸は部品と組み立てをやっていたそうです。

- カラー35

柳澤さんがフォトキナで見た寸法を電話してきてスタート。柳澤さんの指導のもと、当時二十代半ばの、半田さんと今関さんとで設計したそう。「ヒントが何もなくて、デザインも担当者がかってにやっていた。統一感はない。けどおもしろい仕事だった。」(半田さん) 「柳澤さんは、お前らがやるのだから失敗しても誰も文句は言わないよ、できなくて当たり前」と言って任せてくれた。」(今関さん)

半田さんは開発当時ローライを見たことがなく、使いにくいカメラだとは知らなかったそう。沈胴もローライがどうしているのか知らずに設計していたそうで、「お手本がないのが当たり前だったし、見て作っていたら、逆にろくなものにならなかつたらう。」(半田さん)「幅100mmが目標。そのために裏蓋と底を一体化した。高さもそうでないと収まらなかつた。」(今関さん)

雑誌などに書かれている、企画がローライ以前にあったというのは嘘で、営業が勝手に作った話。小型機をやろうという話はあったが、設計開始はフォトキナの後だそうです。

前述のように、「シャッターはおそわる人がいなかった。ケースをダイカストでやったが量産は大変で、旋盤かけると反ってしまった。工夫をして解決した。小さくするためカム板の内側にギアを直接立てていて、(2015.6.1 リバースアダプタ注記: ダイカストのケースの内側と記載していましたが半田さんより間違いとの指摘があり訂正しました。)プレス加工は難しく、最初できないと言われたが、放電加工機を使うことで解決した。」「その後、精工舎の人にうちではとてもできない設計と言われた。」「見る人がいないので勝手な設計。凝った設計だった。楽しかった。やることすべて初めてで、ユニークなものになった。知識があるとできなくなる。そういったものがないのでできた。」(半田さん)とのこと。

Dの赤文字はペトリのラインでやっていた(芦田さん)が、理由はわからないそう。当時のローライはf3.5、カラー35はf2.8。レンズの明るさが違うため、f2.8で世界最小をうたっていた。

発売当初、カラー35は爆発的に売れ、プレミアムがついた。「製造が間に合わなくなり、ドライループの予定のヘリコイドに油を入れたら量産はできたが、シャッター羽根に移り、貼りつくトラブルがでて代理店も扱ってくれなくなり、売れなくなった。設計の問題はたいして出なかった」(半田さん)アサヒカメラのニューフェイス診断室の内面反射の指摘は、半田さんが発売直後にビロードを貼ることで対策したそうです。

35Eも半田さんが担当された。沈胴のやり方変えたのはコストのため。でもフラッシュマチックをつけたそう。この沈胴方式がCF-35の観音開きにつながっていると聞きました。

カラー35は、だいぶあとになり1/500のシャッターも試作まではしたそうです。5枚羽根でサイズは同じだったとのこと。そのあとペトリを辞められたそう。

半田さん、今関さんは、カラー35をやったあと専務(敏夫さん)に言われて課長になったそう。今関さんは、前に入った人を追い抜いたので、その後やりにくかったとのこと。

• FE-S

76年のカメラショーで発表。1秒と1/1000秒がついて、ミラーアップ可能でコンパクト。シャッターなどをユニット化することで達成したそうです。1.7付き850gミラーアップ可能。

142x92x55 ボディ650g FA-1と同じ針抑え式EE横走り布幕メカシャッター。

東京カメララショーはモックアップで、フォトキナ前に追い込みで試作を作っていたとのこと。

2015.6.1リバースアダプタ注記:このインタビューではFE-Sがフォトキナ前、一台しかない試作機は、五十嵐さんがハンドキャリアで運ぶ途中、イタリアの空港で飛行機の乗り換えの時に盗まれたとお聞きし、そのように記載していましたが、その後の追加インタビューで、盗まれたカメラはFTM972の可能性が高くなりました。

• MF-1

末期は人がいなくなり、交換レンズはプラクチカマウントのレンズを買ってくればいからということで、ボディだけやることになった。

潰れる2年ぐらい前、今関さんが、アキレス腱を切り2ヶ月休んで会社に出たら、やなさんにこうゆうのが作りたい、と言われたのがmf-1だったそう。なんと3ヶ月という短期間で設計したそうです。

50/1.7のヘリコイドの方向が2種類ある理由を知っている方はいらっしゃいませんでした。力の入る方向によって部品が緩むことの対策のためでは無いか?(芦田さん)とのこと。

• レンズについて

60年代ペトリのブリーチマウントの交換レンズは望遠レンズも含めてほぼ全数、梅島で設計、生産までしていたそうです。500mmの鏡胴は半田さんの最初の仕事で、業界初のインナーフードを付けたそう。2年後他社が真似してきた。500mmと1000mmは納期3ヶ月の受注生産だったそうですが、これも梅島で作っていた。

500mmで10本ぐらい、1000mmは3本ぐらいしか生産していない(年間1本出なかった)と思うとのこと。(半田さん)

21mmはそれに比べれば結構作ったとのこと。

レンズ設計は ペトリハーフのころ富田さん、その後、島田さんのお二人が設計していたそうです。お二人は早稲田大学の同期で富田さんが島田さんと呼んだそうです。富田さんは昭和 44 年頃退社され西川光学(現在のニシコ光機)を設立され現在も社長とのこと。

島田さんはペトリをやめたあとミランダに移り、さらに大沢商会からマミヤにうつられたそう。余談ですがミランダ dx-3 の小型 EC レンズは島田さんの設計だそうです。芦田さんは、生産技術の担当だったので、当時のペトリのほとんどすべてのレンズを担当したそうです。島田さんが設計したものを評価していたとのこと。

硝材は小原か保谷、一部住田、プレスで買って後は全部梅島で加工。あら取りから、研磨、芯だし、コーティングとすべての工程があり、レンズも全数工程で検査していたとのこと。

55mmf1.4 は島田さんの設計。55mmf1.8 はわからないそうですが、富田さんの設計かもしれないとのこと。ニシコ光機の住所はお聞きしましたので、お話を聞くこともできるかもしれません。

135mm は f2.8、f3.5、f3.8 と、どんどん暗いのを出したのはコストダウンのため。交換レンズ付きで売るので安いものが求められた。最後の3枚玉の f3.8 は島田さん f3.5 は富田さんの設計だそうです。21mm は大変だった(芦田さん)そうで、これは島田さんの設計とのこと。

55mmf1.4 の後群のコーティングの色の変更はハレーションの改善のためとのこと。雑誌の評価でボディの内面反射とされていたのが、実際はレンズのハレーションだったことがわかったためだそうです。

レンズ設計の計算は、最初は算盤、タイガー(手回し計算機)、モンロー(電動機械式)、ズームになりデータもテープで送るコンピュータになったが、よく壊れたとのこと。

カットモデル(いただいた 80-200 の写真など)は富田さんが実際に切っていたのを覚えているそうです。ズーム

はカムを切るのが大変で、親カムをつくり、習いカムで切っていた。滑らかさが出なくて、計算を増やして滑らかにしたりして作成した。

ペリスコープは最初軍隊の要望で作った。(芦田さん) テレスコープになり、撮影もできる。売れなかったそう。使い道は競馬場ぐらい？

レンズによって絞りリングの方向が違う理由はよくわからないそうです。担当者が違うから？あまりそうした統一を意識していなかったからかもしれないとのこと。

- CF-35

ゼニックスで柳澤さんが設計したカメラ。ペトリ工業が開発したと言っていたが、嘘だそうです。朝日新聞に組合が全部始めてやったと載ったけど、まったく間違っていて、当時は柳澤さんのほか、今関さん、半田さん、芦田さんも、時期は多少前後するけれど、ゼニックスにいらっしゃり、一緒に開発していたそうです。生産もゼニックスでやっていて、ペトリ工業は販売しただけとのこと。ペトリの最盛期を支えていた技術者の方が設計したカメラということになります。ペトリカメラの系譜に連なるものと考えて良いようです。

- フォトクローム

柳澤さんが基本設計、半田さんがシャッターを担当されたそうです。柳澤さんは一生懸命に取り組まれて、よく考えられていたそう。真っ暗じゃなくて、豆電球ぐらいの明るさのもと、洗面所などで自分で現像できる簡易現像

キットがあり、半田さんは自分でやったことがあるそうです。ポラロイドがインスタントマチックを出したので(半田さんはそう言われてましたが、後で調べたら、多分同じ年に出た、ポラロイド・スウィンガー・カメラと いう 20 ドルの安い機種のこと?)ダメになり、最後は型ごとそっくりどこかに売ってしまったとのこと。

- 一眼レフのシャフト駆動

FTII のレバー式への切り替えは低温対策とのこと。

「北海道の販売店から文句がきた。倉庫から出したら動かないから。」(半田さん) 当時はこのカメラもそうだったが、ニコンだけは動いたそうです。

「V6 とか 4~5 度で動きが悪くなる。4 軸がコの字配置で幕が固まるので、FT で配置がストレートなのは低温対策と 1/1000 が安定するため。V6 は 1/500 までしかだせなかった。」「シャフトは軸が暴れるので、本当には低温に耐えられなかったが、レバー式は-10℃目標で-5℃まで動いたと思う。」(半田さん) この部分は前田さんという方が担当されたそう。FTII は実験しても大丈夫だったので低温には自信があるとのこと。「V6 や FTE も機構はそのまま低温対策はやったけど、0℃ではダメだと思う。」(半田さん)

- ペトリの品質

半田さんにお聞きしました。当時、故障率を調べたがそれほど悪くなかったそう。「低温は他社も悪かったが、V6 はちょっとひどかった。それ以外は極端にどこが悪いというのはなかった。」(半田さん)「他社の半額だったし、ニコンやキヤノンのカメラで撮った写真とペトリで撮った写真を A4 に伸ばして比較してもわからない。全紙に伸ばしてわかるかな? ネームバリューは違うが。」「メッキだとかは悪いものもたまにでたが、メッキをきれいにするために下地を類墨で磨くなど、手間をかけていた。」(今関さん) 裏蓋はハンマーでたたいてあわせる。これはニコンでもそうだったとのこと。マウントの取り付け部分は工程で組み立ててから挽いていたので方ボケも少ないはずとも聞きました。アサヒカメラの V6 のビス止めがあまいという評価は、中学でたての 15、6 の子が手で締めるので落ち度はあったかもしれないとのこと。当時は電動ドライバーが無く、スナップを効かせたり、ゴムを巻いて太くして力が入るようにする、などの対策していたそうです。

半田さんがお持ちの FT の試作、量試品を見せていただきましたが、今でもちゃんと動いていました。一度もなおしてないし、当時テストにも使っていたやつで、買ったものでは無いそう。構造が簡単だからだろうとのこと。V6 は興味が無く持ってないのでわからないそうです。

- ペトリの倒産の理由

ペトリがダメだった理由は、電子化の遅れ、放漫経営、組合活動の激化など。電気関係は人を入れなかったそう。弱電をやらなきゃダメなのはわかっていたが、言っても人材をとってくれなかったそうです。当時、柳澤さんは組合交渉に時間を取られていたとのこと。

余談ですが、倒産前にペトリを離れた半田さんは、プロニカの次にミランダで dx-3 の量産に向けた改良を手がけたそうです。弱電に関してはペトリよりはるかに進んでいて、素晴らしいカメラだったけれど、改良を実施する前に倒産してしまった。とお聞きました。

半田さんは、ペトリ倒産の二日前に噂をきいたので、今関さんに電話したそうですが、今関さんは全然信用しなかったそう。当時バンバン出荷していたから。そのころの売り上げの現金はどこにいったのか? 当時、いろいろわさがあつた。スイスにいったとか。

- まだ残る謎

ペトリペンタのミラー駆動、ペンタ V の 1/1000、フレックス 7 の件は、みなさん入社前のことでわかりませんでした。

ただ、V6 系のシャッターで 1/1000 は厳しく、やったとしても輸出検査に通らなかったのでは? (芦田さん)とのご意見でした。

FTEE FA-1 の発売が発表から時間がかかった件や、exaktaFE2000 の件も記憶が不確かがよくわからないとのこと。

まぼろしのペトリに載せている FTM972 も記憶にないそうです。ただ、小型化の検討は常に行っていたとのこと。

末期の M42 マウントレンズは、どこから調達したか、わかるかたはいませんでした。RE(マイクロコンピュータ)は末期に今関さんが設計されたそうですが、REII、ES-AUTO などをご存知ありませんでした。

もう少し早かったら柳澤さんに話が聞けたのに残念、柳澤さんがペトリの歴史そのものなので、亡くなってしまった今、永遠にわからないのでは? とのお話もありました。

- 最後に、ペトリで一番ご記憶に残っているお仕事を聞きました。

半田さんは、カラー 35。いろんな問題にぶち当たりながら、それを解決して完成できたのが 楽しかったそうです。

今関さんもカラー 35。最初ではないが 24-5 の時にやった仕事で、しっかりした小さな形で、プレミアムもついたから。とのこと。

芦田さんは 55/1.4 とのこと。画質を出すために何度も試作したそうです。

- 終わりに お三人は、当時のことは忘れてと思っていたが、会って話し、カメラや昔の写真を見ることで記憶が蘇ってきたと

のこと。

今回のインタビューの話を聞いた時、みなさん、ペトリを好きな人が今もいることにびっくりしたそう。でも、そういうひとがいてくれて、嬉しいとおっしゃっていただけました。多少なりとも喜んでいただけただけで、無理な願いをしたこちらとしても嬉しかったです。

梅島までご足労いただき、貴重なお写真もいただきました。また、4 時間近くもの長時間にわたり、お話ししていただきました。

半田さん、今関さん、芦田さん、たいへん感謝しております。ありがとうございました。

文責:リバーアダプタ